〈論文〉

河上肇の日本経済思想史研究

杉原四郎

I

河上肇は1902（明治35）年に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し，経済学の研究を志して大学院に進んだが，当初の彼のテーマが日本経済思想史であったということは，あまり知られていない。だがそのことを後年河上自身つぎのように確言している。「滝本博士に就て知れることども」と題する文章である。

「私が初めて滝本（誠一）博士に御目にかかったのは，明治三十五，六年の頃であつたと思ふ。当時博士は『明義』と題する月刊雑誌を発行して居られた[1]が，其雑誌に私が拙文を寄稿した事[2]が，博士に知らるゝに至つた最初の縁だと記憶する。当時は私が大学を卒業して間もない頃のことであつた。私は大学院に席を置いて，窃に日本経済思想史の研究に志し，やがては其を大学院の論文にする積りであつた。然るに博士は，それよりずつと以前から同じ事に志して居られたので，当時は已に少からざる文献を蒐集されて居たのである。殆ど何人も着手し居らざるべしと考へて居たこの方面の研究に，

1）桐生悠々は青年時代『明義』に関係したが，この雑誌について自伝「思い出るまま」の中でつぎのようにのべている。「『明義』は前記滝本誠一氏が主宰した雑誌であり，その後援者は氏が私に蜂須賀侯の訪問を勧めたことによって暗示された如く，一派の貴族によって支持されたものであったろう。だから，同誌発刊の目的は当時窃に勃興しかかっていた社会主義を排撃することであったらしい。穂積八束博士がこれに参画していたことによっても，この辺の消息が察せられる」。太田雅夫編『桐生悠々自伝』，現代ジャーナリズム出版会，1980年，65ページ。

2）河上が『明義』に寄稿した最初の文章は「憲法上天皇の地位を論ず」（第3巻第8号，明治35年8月）で，最終の寄稿は「農業保全新策」（第6巻第5号，同38年5月）である。

博士が早くも着目して居られた事は，当時余の窃に敬服した所であつた。私は最初博士から佐藤信淵の『垂統秘録』を借用して写し取つた事を覚えて居る。其と同時に，私が三浦梅園の『価原』を貸した事も覚えて居る。博士は初めて其本を見ると言はれたと思つて居る。して見ると，当時博士は已に少からざる文献を蒐集して居られたとは言へ，『価原』を珍らしがられた位だから，今日から考へると，まだ随分不備であつたと云はなければならぬ。然るに其後余は，諸般の事に妨げられて最初の志を擲つたけれども，博士は二十年一日の如く其事業を継続せられて，其結果が遂に『日本経済叢書』の公刊と為つて現はれたのである」[3)]。

この文章からわかることは，河上が日本経済思想史を自分の研究テーマにえらんだ理由の一つは，この研究分野が当時「殆んど何人も着手し居らざるべしと考へて居た」からであろうということである。この河上の考えは滝本誠一（1854—1932）が「それよりずっと以前から同じ事に志して」いたことを知って修正せざるを得なかったものの，滝本の研究も当時はまだ「随分不備であった」ことも判明した。したがって滝本の研究を知ったことが河上をして日本経済思想史の研究を断念させる主な原因となったとは考えられない。河上が「其後……諸般の事に妨げられて最初の志を擲った」という「諸般の事」とは，河上が東大農科大学実科講師に就職して農政学を講議することになり，農政学の研究に時間をとられるようになったこと，経済原論や社会主義など，河上にとって学問的な興味をそそるテーマがあらわれてきたこと，さらに無我苑への参加や，讀賣新聞記者・『日本経済新誌』主筆といったジャーナリストの生活が，日本経済思想史研究への沈潜を許さなくなったことなどが考えられよう。だが1908（明治41）年に京都帝国大学法科大学の講師に

3）『大学及大学生』第10号，大正7年8月。全集第9巻，476ページ。なお滝本編『日本経済叢書』全36冊は1914（大正3）年6月から1917（同6）年12月の間に刊行されたが，この刊行については福田徳三や内田銀蔵とともに河上肇も尽力した。本庄栄治郎はいう，「滝本博士蒐集の史料の価値を最初に認めたのが河上博士で，福田・内田両博士の協力の下に遂に『日本経済叢書』の誕生となったのであるが，その底本となった原本の大部分は，その後京都大学経済学部に収蔵されることとなった」。『日本経済思想史』，本庄栄治郎著作集第2冊，清文堂，1971年，325ページ。

就職，学究としての生活を送るようになってから，河上のこのテーマへの関心が復活し，日本経済思想史に関する研究成果が断続的ながら発表されるようになる。そうした経過は，河上が大学院に進学してから1913（大正２）年に留学するまでの約10年間の，この分野に関する彼の労作をたどってゆくとよくわかる。公表された日時順にあげたのが次のリストで，カッコ内のアラビア数字は，その文章が収録される河上肇全集の巻数である。

「新策正本ニ見ハレタル頼山陽ノ経済学説」，『国家学会雑誌』第16巻第187号，明治35年９月 (1)

「徳川時代ノ経済学説ヲ論ズ」，同17—191，36—１ (1)

「維新前に於ける学者の財政説」，『税務行政』，３—２，36—６ (1)

「江戸時代に於ける帝国主義」，『国家学会雑誌』，17—202，36—12 (1)

「徳川幕府ノ穀物政策」，[4] 同 18—204，206，208，37—２，４，６ (1)

「佐藤信淵先生を憶ふ」，『明義』，５—３，37—３ (1)

「佐藤信淵先生の防海策」，同５—９，37—９ (1)

「三浦梅園ノ『価原』及ビ本居宣長ノ『玉くしげ』ニ見ハレタル貨幣論」，『国家学会雑誌』19—５，38—５ (6)

「『大学惑問』ニ見ハレタル熊沢蕃山ノ経済学説」，『国家学会雑誌』20—１，39—１ (2)

「佐藤信淵家学大要の発刊」，『讀賣新聞』10599，39—12—11 (3)

「集義和書に見はれたる熊沢蕃山の経済学説」，『国家学会雑誌』，21—10，40—10 (4)

「佐藤信淵を憶ふ」，『日本経済新誌』４—１，41—10 (6)

「『経済十二論』梗概」，『京都法学会雑誌』３—11，41—11 (4)

「『無欲』ノ意義」，同 ４—８，42—８ (4)

「幕末ノ社会主義者佐藤信淵」，同 ４—10，42—10 (6)

「『梅園全集』の公刊」 同 ８—８，大正２—８ (7)

4） この論文は河上『日本農政学』（同文館，明治39年）の第２編第２章第２節「維新前に於ける貴農主義」に利用されている（89—116ページ参照）。

以上の16篇の文章の中で，河上は『経済学研究』という論文集を1913（大正2）年に刊行した時「幕末ノ社会主義者佐藤信淵」と「三浦梅園ノ『価原』及ビ本居宣長ノ『玉くしげ』ニ見ハレタル貨幣論」とを採録し，その際序文で三浦梅園論について補足するところがあった。また1911（明治44）年に出した随想集『経済と人生』の中に「佐藤信淵を憶ふ」を採録した。このことは，河上がとりあげた徳川時代の多くの思想家の中で彼が重視しているのは三浦梅園（1723—1789）と佐藤信淵（1769—1850）の二人であることをしめしている。なお河上は同文館の『経済大辞書』第1冊に新井白石と荻生徂徠とを

（明治43年12月），また小島祐馬との連名で正司考棋（第4冊，明治45年7月）と大宰春台（第6冊，大正3年7月）とを執筆しているが，いずれも小島祐馬の手になるものなので，上掲のリストからはずしてある。

II

外国留学までの河上の業績を上掲のリストで見てゆくと，時に断絶は見られるが，1913年まで労作の発表がつづいており，河上が日本経済思想史に関心をもちつづけていたことがわかる。その間に発表された16篇の内容を見ると，個々の思想家を別々に論じたものと，一般的概論的なものとがある。まず後者をとりあげ，その後で個別的な研究を見ることにしよう。

「徳川時代ノ経済学説ヲ論ズ」は，其のタイトルが示しているように，個々の経済学説をとりあげる各論的文章に対する総論ともいうべきもので，その「序説」のつぎの部分は，この論文の論旨を要約したものである。

「徳川時代ニ於ケル経済学説ヲ大観シテ吾人ハ略ボ左ノ如キ特徴ヲ発見ス。

1．経済学ナル用語ヲ以テ国家学ナル用語ト同一視セルコト。

2．農業ヲ以テ国ノ本ナリトナシ土地収益ノ無限増加ヲ信ゼシコト。

3．貨幣ヲ賤ミテ米穀ヲ尊ベルコト。

4．田舎ノ人口ガ都会ニ流入スルヲ嫌ヒシコト。

5．奢侈ヲ非難シテ節用ヲ奨励セシコト。

6．入ルヲ量リテ出ヅルヲ制スルヲ以テ経済ノ原則ト為セシコト。

7．支那古代ノ学説ヲ尊重セシコト」。[5)]

河上はこの各項目について佐藤信淵や太宰春台[6)]や頼山陽の所説を例示し，そういう学説がとなえられた原因を考察している。たとえば第2点について「其ノ主ナル原因ハ大略左ノ三者ニ帰着ス」とのべ，(1)鎖国時代は外国との交易がないので「米穀生産額ノ多少如何ハ直チニ国民生活ノ安危如何ニ拘ハル」，これが農業国本論の原因だ，(2)当時人口もすくなく土地の生産も地力逓減の法則に支配されるに至らなかった，これが土地収益の無限増加を主張した原因だ，(3)さらに彼らは「支那古代先王ノ道ヲ祖述セシモノ多」いが，中国の地は広く土が肥えているので，先王の道は農業立国論や地益無限増加説に傾くのは自然だから，その影響が彼らに及んだのだ，と説いている。

河上はこのような観点に立って，徳川時代の経世家の何人かの思想を各論的にいくつかの論文で紹介・論評している。彼が諸論文でとりあげている思想家は「徳川幕府ノ穀物政策」の第1章第2節「江戸時代穀物ニ関スル経済学説」では，伊藤仁斉からはじまって，荻生徂来，松平定信，熊沢蕃山，佐藤信淵の所説がとりあげられている。この5人を含めて10人を越える[7)]が，

5）『国家学会雑誌』第17巻第191号，52—53ページ。徳川時代の経世家の思想が「支那古代ノ学説」に影響されている以上，その方面の研究が必要となることは当然で，河上も「孔子の経済思想」を『財界』（第3巻第3号，明治38年6月）に発表している。

6）河上は「維新前に於ける学者の財政説」の中で太宰春台の『経済録』等の著書をとりあげている。そして「彼は多くの学者と同じく支那の学説を尊崇せり。……財政に関する彼が学説も亦た所謂先王の道を祖述せるものなり」とのべている。『税務行政』第3巻第2号，29—30ページ。

7）河上は井上潜——河上は土井潜と書いているが井上潜の誤りであることについては，全集第4巻の編者大野英二の校注（615ページ）を参照——の『経済十二論』を紹介した文章（『京都法学会雑誌』，第3巻第11号）の中で，「今後余ハ，若シ本誌ニ余白アリ余ニ余暇アラバ，可成之ヲ利用シテ，吾ガ国民の祖先ガ嘗テ有シ居タリシ経済思想ヲ，一人宛又ハ一書宛順序ニ紹介シ，斯クテ日本経済学前史ノ資料ノ一部ニ供セン歟ト考フルマデ也」とのべている。そして同誌第4巻第8号にのせた「『無欲』ノ意義」で中江藤樹，石田梅巌，西川求林斉の所説をとりあげている。だが新しい人物や著作の紹介はこれが最後となった。

その中で最も重視しているのは，さきにのべたように，三浦梅園と佐藤信淵の二人である。河上はこの二人への関心を欧州留学に出発した後も持ちつづけていたことは，後に見る通りである。まず彼の梅園論から紹介しよう。

滝本誠一との交渉を書いた上掲の文章の中に出てくる三浦梅園の『価原』について，河上が発表したのが上掲のリストにある「三浦梅園ノ『価原』及ビ本居宣長ノ『玉くしげ』ニ見ハレタル貨幣論」である。河上はそこで二人の貨幣論を別々に紹介したうえで両者を比較・論評しているのだが，梅園の方に宣長に割いた約4倍の紙数をついやし，梅園が貨幣数量説やグレシャムの法則を認めていること，一方では工商を無視しえず，他方では自足経済を保持すべきだとする彼の議論が「往々明瞭を欠き，多少の窮処を存する」ことをのべるとともに，「之を要するに，二者共に時勢の影響を受けて，其の論ずる所大同小異なるに止ると雖も，しかも梅園の見識は宣長に比して数段の上に位する」と評している[8]。

河上はこの論文を『経済学研究』(博文館，大正1年)に収録するに際し，福田徳三が「梅園が徳川時代有数の経済学者の一人として数ふ可きものなるを始めて世に示したるは専ら学友河上（肇）教授の効に帰すべし」という一文を引用するとともに，『価原』をはじめて雑誌の上に紹介したことに誇りを持つと述べている[9]。そしてアダム・スミスと三浦梅園との二人が「実に驚くべき程完全なる意味にての contemporaries である」と書いている[10]。

つぎに佐藤信淵論について。上掲のリストが示すように，信淵がタイトルにあらわれている文章が5篇あるが，その他前述の「徳川時代ノ経済学説ヲ論ズ」や「徳川幕府ノ穀物政策」にも信淵は登場するし，「江戸時代に於ける帝国主義」はまさに信淵論そのものである。つまり全16篇の約半数が佐藤信淵にかかわりがあるわけで，これだけでも当時の河上の信淵に対する関心の

8）河上『経済学研究』，388ページ，全集第6巻，364ページ。

9）滝本誠一も梅園の『価原』を学界に紹介したのは河上が最初であるとしている(『日本経済典籍考』，日本評論社，1928年，148ページ)。田口正治も，梅園の名は哲学者としてよりもまず経済学者として紹介されたが，それは河上が「その卓越した貨幣論を学界に紹介したからであった」とのべている(『三浦梅園』，吉川弘文館，1967年，334ページ)。

深さがわかるであろう[11]。

三浦梅園の場合とちがって，佐藤信淵の著作は明治初期から種々のかたちで紹介されており，その経済思想についても，河上の東大大学院での指導教授だった松崎蔵之助がすでに明治22年1月に「日本ノかめらりすと」を発表していた[12]。河上はそれらによって信淵の人物と思想に関心を寄せることになる。そしてその頃わが国でも帝国主義と社会主義とが同時に大きな問題となって登場するのだが，この20世紀初頭の問題関心を彼は信淵の著書に読み込んでいったのである。

河上が自分の書いた多くの信淵論の中から『経済学研究』に採録した唯一の文章は「幕末の社会主義者佐藤信淵」である。彼はその中でまず，信淵が『垂統秘録』で説いている三原則，つまり(1)一切の売買・貸借・雇用は私営から国営にうつす，(2)全国民は国家の使用人となる，(3)租税を全廃して国費は公営事業の利潤でまかなう，をあげ，この三原則を実現する方策を，階級の全廃，六府の設立＝一切産業の公営，私人間の売買貸借の禁止，軍備，三台の設立＝国民の教育は一切官費に依る，貧民救済の順序で説き，最後に信淵の思想は「西洋の社会主義輸入前に於ける社会主義的思想の萌芽の最大なるもの」だと総括的評価を下している。松崎も前掲の論文で，信淵の思想が「社会主義に傾向する所あるを見る」としていた[13]が，河上はさらに一歩を進めて社会主義者と規定した。これに対して福田徳三は，信淵は社会主義者ど

10）同上，序文32—33ページ，全集第6巻，159—160ページ。スミスと梅園との比較を河上は「『梅園全集』の公刊」でも試みている（全集第7巻，414—415ページ）。なお河上は福田が「ボアギュベールの貨幣論と三浦梅園の貨幣論に就ての愚考」（『国家学会雑誌』，明治43年6月）の中で自説を批判したことを受け入れ，自分の梅園論を『経済学研究』に収録するに際し「其処の部分は……削除して仕舞った」，同上，序文35ページ，全集第6巻，160—161ページ。

11）河上肇文庫には佐藤信淵関係のつぎの諸文献が見られる。佐藤信淵『集統秘録』（抄録），明治10年版の私本を河上が自寫したもの。津田郷一郎『佐藤信淵伝』（著者自筆）。『佐藤信淵翁家学大要』（明治39年），見返しに「呈河上学兄，穂積陳重」とある。滝本誠一編『佐藤信淵家学全集』全3巻，大正14—昭和2年。

12）『国家学会雑誌』第3巻23，26，28号，明治23年，松崎『経済危言』（読売新聞社，明治41年）所収。

ころか「明白に非社会主義たる」こと，彼が社会政策を提唱したということは議論の余地があるかもしれないが，「私に於ては徳川時代其ものが社会政策を云々するような時代ではなかったと感ぜらるる」とのべている[14]。この評言に対し河上は何ものべていないが，おそらくそれは彼も認めざるをえなかったのではないかと思われる。

III

河上は1913（大正2）年秋に神戸から欧州留学に出発するが，祖国からの旅立ちがすなわち日本経済思想史研究からの訣別を意味するものでは決してなかった。そのことは彼が三浦梅園の『価原』をたずさえていったことからもあきらかである。

河上は留学先のベルリンで世界大戦の勃発に出会う。その時の不安の日々を記録したのが「伯林脱走記」（『大阪朝日新聞』，大正2年10月7－9，16－17日，『祖国を顧みて』，実業之日本社，1915年に収録）であるが，その中につぎのような一節がある。

「此物情騒然たる中に独りで残るのは聊か心細いが，併し私に云はせると，今は戦時経済の大実験が行はれつつある最中である。医科や理工科の人々は，大学の実験室が凡て閉鎖された以上，茲に居るのは全く駄目だと云って居たが，吾々経済学の書生に云はせると，恰も其と反対で，今は独逸全国が非常経済の大実験室に充てられているのである。それで私は戦時を通じて断然伯林に残る決心を立てた。……私は凡て未定の状態に心身を置き得ぬ質で，

13）『経済危言』321ページ。なお松崎は「徳川時代の社会主義」（『国家学会雑誌』，明治27年，第8巻第83，91号）でも佐藤信淵のことをとりあげている。

14）福田『経済学全集』第3巻（同文館，1925年），1377－1378ページ。田辺元生も「『佐藤信淵の経済思想』研究史」の中でつぎのようにのべている。河上の信淵論には「多分に博士の理想の投影がみとめられる。……信淵の時代はまだ封建末期で，多少資本主義的要素が芽ぐんでゐても，まだ資本主義ではなく，ましてその次にくるべき社会主義が理想として求められる筈もない。それ故信淵を社会主義者であると規定しては，信淵の歴史上における地位を正しくつかまなかったものと言へよう」。『経済史研究』第27巻第6号，78，85ページ。

兎も角右か左かに物を決めて置かなければ安住が出来ない。……私は一旦決心した以上万事平生のままにして，やりかけた三浦梅園『価原』の独訳を続けて居る。残ると決心したからには様子を聞く要も無いと思ったので，最早大使館へも行かず，日本倶楽部へも行かず，泰然として落ちついて居る」[15]。

ところがその後間もなく事態が急変し，大使館の指示で在留邦人は即刻ドイツから立ち去ることになり，河上もあわただしくオランダに脱出，ロンドンに向った。『価原』の独訳の仕事はどうなったのか，河上は何の記録ものこしていないが，多分中断されたままになったのだろう。

河上は1915（大正4）年2月留学から帰国した。それ以後の彼の歩みの中から，彼のいわゆる「日本経済学前史」に対する関心がのこっている痕跡をいくつかひろい上げておくことにしよう。

(1)京都帝大経済学会の機関誌『経済論叢』第2巻第5号（1916年5月）は，マルサス生誕 150年記念の特輯として刊行されたが，河上はその編集の中心となり，12篇の論説中最も長篇の「まるさす人口論要領」を執筆するとともに，「まるさす及ビ人口論関係書目」の中の2項目を編纂し，さらに「まるさす生誕 150年記念会記事」を書いている。河上の執筆したこれらの文章の中には日本経済思想史に関説したところはないが，当時同志社大学教授だった滝本誠一が「支那及日本の人口論」という論文を寄せ，佐藤信淵，荻生徂徠，山縣周南らの人口論を紹介している。また1916年2月13日に京大で開かれた記念会での図書展示には，滝本の所蔵する人口論関係の徳川時代の和書が出品されたが，その和書のリストが滝本自身の解説つきで掲載されている。マルサス記念のこうした行事に滝本の協力を求め，人口論と日本経済思想史との関連に配慮することを忘れなかったところに，河上の問題意識をうかがうことができよう。

(2)『経済論叢』第3巻第3号（1916年9月）に寄せた「『通俗経済文庫』巻一ヲ読ミテ」という文章で河上は，滝本誠一の『日本経済叢書』の姉妹叢書として刊行されることになった『通俗経済文庫』の第一巻を紹介している。

15）『祖国を顧みて』，153—154ページ。全集第8巻，82—83ページ。

河上はこの文庫によって過去の「民間経済思想ノ一斑ヲ知ル」ことができるのは，「源流ニ遡ッテ日本ノ経済生活及ビ経済思想ヲバ親シク研究セントスル者」にとって「少カラヌ貢献ヲ為スモノ」としている。そして第一巻に収められている8部の書籍から彼の興味をひく部分を引用している[16]。

(3)『貧乏物語』(弘文堂書店, 1917年)の中で河上は日本経済思想史上の諸文献を活用して論旨の展開に効果をあげている。たとえばマルクスの経済的社会観に似た思想が古くから東洋にも在るとして論語の「食を足し，兵を足し，民をして之を信ぜ使む」という文章をあげた後，熊沢蕃山の之に対する註釋を引用しているのだが，それは彼の「集義和書に見はれたる熊沢蕃山の経済学説」の中でも引用されていたつぎの箇所[17]である。

「『食足らざるときは，士貪り民は盗す，争訟やまず，刑罰たへず，上奢り下諛て風俗いやし，盗をするも彼が罪にあらず，是を罰するは，たとへば雪中に庭をはらひ，粟をまきて，あつまる鳥をあみするが如し。……是乱逆の端なり。戦陣をまたずして国やぶるべし。兵を足すいとまあらず。況んや信の道をや』(集義和書，巻13，義論8)。此等の文章を読む時は，吾々は既に幕府時代に於いてロイド・ジョージの演説を聴くの感がある」[18]。

また前項で紹介した「『通俗経済文庫』巻一ヲ読ミテ」の中で引用されていた『金銀万能丸』と『町人身体柱立』の経済観や，『通俗経済文庫』巻二にある『生財弁』の貧乏論も，叙述の中にたくみに織り込まれている[19]。

(4)『経済論叢』第18巻第1号（1924年1月）はアダム・スミス生誕200年記念号で，全巻スミス関係の論説，書目および1923年6月5日に開かれた記念会の記事にあてられている。河上は「スミスの所謂『真実の価格』について」を書いているのみであるが，経済学史の担当教授として，本巻全体の編

16）全集第8巻，460—461ページ参照。

17）全集第4巻，115—116ページ。

18）『貧乏物語』，岩波文庫，121ページ，全集第9巻，91ページ。『貧乏物語』ではこの引用箇所を『集義和書』巻13，義論8としているが，義論6の誤りであろう。日本思想大系第30巻『熊沢蕃山』(岩波書店，1971年）247ページ参照。

19）『貧乏物語』1の1，2の2，11の3（全集第9巻，9，29—22，92—94ページ）参照。

集にもかかわっていると思われる。その点で注目されるのは，本庄栄治郎・岡崎文規・河上福平共編の書目の第2類「スミスに関係ある和書」の4「スミスと同時代の日本の経済学者及び其著書」の項に，三浦梅園，井上四明，本居宣長，中井竹山など河上がかつてとりあげたことのある思想家をふくむ17名の名前とその著書が列記されていることである[20]。

(5)『第二貧乏物語』(改造社，1930年)の第一回の「一，まえおき」の中で佐藤信淵の著書『混同秘策』および『呑海肇基論』のそれぞれの序文の一部が引用されている。河上は，信淵が「聊か以て晩遠の鬱憤を寫し，固封して兒孫に遺す」とのべた『混同秘策』や，彼の長子が「此書世上に漏ば，或は越俎の刑あらんことを畏」れて安濃津侯に献ずることを阻止しようとした『呑海肇基論』を起草したのは，封建社会の崩壊期という「社会の客観的情勢が佐藤信淵なる『草間の一小父』の頭脳に反映し」たからだとのべている[21]。見られるように，ここでは信淵の思想の内容が問題になっているわけではなく，イデオロギーの唯物論的把握の一例として彼の著作があげられているにすぎないが，その例として信淵の二著作が選び出されたことに，彼に対する若き日の河上の傾倒の残照が見られよう。

Ⅳ

最後に，河上肇の田口卯吉論を見ることにしよう。河上にとって，田口卯吉は，日本経済思想史または日本経済学の転換期に立つ重要な人物であった。河上は『経済学原論』上巻（有斐閣書房，明治38年）の「経済学ノ定義」を論ずる節の中の「我ガ国ニ於ケル経済学一新ノ時期」という項目で，つぎのように書いている。

「我ガ国ニ於ケル経済学ハ維新前後ニ於イテ大ナル差異ヲ有スルガ如シ。否ナ寧ロ維新前ハ経済学未生前ノ時代ニシテ，日本経済学史ノ前史ヲ為スベキモノト云フベシ。而シテ，恰モ維新ヲ一期トシテ『経済』ナル文字一変シタ

20）『経済論叢』第18巻第1号，382ページ。

21）『第二貧乏物語』10—11ページ。全集第18巻，62—63ページ。

ルノ観アリ。維新前ニ在リテハ，

所謂経済トハ国土ヲ経営ミ人民ヲ済救フノ義（佐藤信淵，経済問答），

凡ソ天下国家ヲ治ムルヲ経済ト云フ，世ヲ経メ民ヲ済フト云フ義ナリ（太宰純，経済録），

ト云フガ如クニ経済ヲ解セリ。シカルニ，等シク維新前ニ在リテモ維新ニ近ヅクニ従ッテ経済ノ意義稍々変遷シ，現ニ橋本敬簡ノ経済随筆ノ如キハ全ク私人ノ経済ヲ論ジタルモノ也。而シテ維新後ニ至リテハ，経済ヲ以テ経世済民ノ義ニ解スルコト殆ド廃レタリ。

而シテ恰モ此ノ経済ノ意義一新ノ時期ヲ劃セルモノハ，故田口博士ノ『日本経済論』（明治11年）ニアラン。故ニ予ハコノ書ニ見ハレタル経済学ノ観念ヲ茲ニ附記スルノ無意味ナラザルヲ知ル」。

河上は続いて田口の『自由交易日本経済論』（1878，明治11年）から長文を引用しつつ，人々の需要に応じて「人為現象ノ流動シ静止スル所以ノ理ヲ研究スルモノ，即チ経済学ナリ」という田口の経済学観を紹介している[22]。

田口卯吉は明治38年4月13日に逝去したが，河上はただちに筆を執って自分が編集事務をとっていた『国家学会雑誌』に「田口博士を弔す」を発表した。河上はその中の「(1)学史中の学者」で，「博士は『日本経済学史』の初章（又は『日本経済学前史』の末章）を飾るべき一学者なり」とのべている。そして田口の経歴と著述を紹介し，『自由交易日本経済論』における経済学の定義と自由貿易論の骨子をのべた後，最後の「(6)斯学に対する博士の貢献」において，田口の「貢献は之を一言にして蔽えば，斯学の普及にあらん」とし，つぎのような評言を以て結んでいる。

「博士多能にして，殊に史学を好む。もし其の史学上の智識と経済学上の智識を連絡し調和して，経済史の研究を試みられたらんには，博士独創の見識必ずや見るべきもの多かりしならんに，不幸博士の経済説は寧ろ抽象派にして演繹派に属せしかば，遂に二者の連絡を見るに至らざりき。予博士の生時に於いて常に之を思ふて遺憾と為したりき。今や其の逝去に際し，感更に深

22）『経済学原論』上，225—228ページ，全集第2巻，161—163ページ。

し」[23]。

河上肇は書生時代に田口卯吉の謦咳に接したことが一度あった。その時の印象を彼は後年「田口先生の思ひ出」という一文でつぎのように書いている。河上は東大の教授たちの講義よりも島田三郎の主宰する毎日新聞の講演会から多くの感化をうけたのだが，その講演会で「私は始めて田口先生を見た。先生は洋服を着て居られたが，づぼんからハンケチを出しては口をふき，それを始終くりかえして居られた。その態度が如何にも場所慣れぬといふ風に見えた。もちろん当時の先生は，すでに何百回となく演壇に立たれた後であったらうが，それにも拘らず如何にも場所慣れしてゐない風をされてゐるのを見て，私はなつかしく感じた。演説の内容はすっかり忘れて居たが，その感じのみが，今もなほありありと残ってゐる」[24]。

田口の経済学の理論的性格や政策的主張に対して河上は当時もその後も決して同調するものではなかった。にもかかわらず河上は，田口が日本経済思想史上にはたした役割りを高く評価するのみならず，その人物に対しても親近感をいだいていたということは，上の三つの引用がよく示している。このような気持が河上にあったればこそ，昭和3年『鼎軒田口卯吉全集』の第三巻（経済の上，理論及理論闘争）の解説を書くことを依頼された時，日本経済思想史研究からは久しく遠ざかっているにもかかわらず，執筆をひきうけたものと思われる。河上はその中で，『自由交易日本経済論』の経済学論と自由交易論の骨子を紹介し，それらが「大体イギリスの経済論の流れに属するもののやうに思はれる」とのべた後，つぎのように田口の経済学の社会的根據を論じている。河上のマルクス経済学者としての視角がそこにはっきりとあらわれているといってよいであろう。

「我々は今どういふわけで明治時代に博士を通して以上の如き経済学説が日本に現はれたかの社会的根據について，はっきりした根據を述べえないことを遺憾とする。しかし，もし単なる思ひつきを附記することを許されるなら

23） 全集第2巻，365ページ。

24） 『我等』第9巻，第6号，1927年7月，天野敬太郎編『河上肇随想録』，河出新書，1956年，159—160ページ。全集第16巻収録予定。

ば，恰も明治時代に於ける日本社会の資本主義への推移が，専ら内的発展の結果として行はれたのではなく，少からず欧米資本主義の外部的刺激に負ふところがあったやうに，経済学もまた多くは外国からの輸入品であり，その成立の社会的根據は日本に於けるよりも寧ろより多く外国にあったのではないかと思ふ。私自身は明治30年代の末に，博士の『東京経済雑誌』に対抗する意味をもって，『日本経済新誌』の創刊に與かり，しばらくその編纂を主宰してゐた[25]ものだが，むしろ此の雑誌の方がより多く当時の日本ブルヂョアジーの利益を代表してゐたのではないかと思はれる」[26]。

むすび

以上見てきたように，日本経済思想史の分野における河上の研究業績は，明治維新以前については1913—15年の留学までで一応終っている。1915年以降京大での日本経済思想史研究は，本庄栄治郎によってうけつがれた。本庄は河上が担当していた経済史の講義をうけつぐ[27]のだが，研究の中心は徳川時代の日本経済史におかれ，かたわらその時代の経済思想にも研究をおし進

25）『日本経済新誌』については全集第4巻の大野英二の解題（593—603ページ），杉原「河上肇と『日本経済新誌』」（杉原・一海共著『河上肇　学問と詩』，新評論，1979年所収）参照。

26）『鼎軒田口卯吉全集』第3巻，1928年，解説8ページ。この解説は改造文庫本の田口卯吉『自由交易日本経済論』（1929年）にも収録されている。なお田口の『日本開化之性質』（1885年）を河上は櫛田民蔵への1916年6月4日の手紙で「日本経済学史上の珍籍」と評価している。

27）本庄栄治郎の自伝「私の思い出」によれば，彼は学生時代河上肇から社会主義論や経済史の講義を聞いた。また大学院の進学について河上の世話になった。さらに彼は論文「徳川幕府の米価調節」で京大で最初の経済学博士となるのだが，その論文を留学先のパリから恩師の河上肇に送り，「河上先生はこれを弘文堂の主人に交渉して印刷に附して京大へ三部提出の手続きをとって下さった。そればかりでなく印刷の校正についても小島祐馬氏の御紹介で府立第一中学校の国語の中島先生に御願して下さった」（著作集第10冊，清文堂，1973年，438ページ）。また彼は「日本経済思想史研究の発達」の中で明治以降におけるこの分野の研究史をあとづけているが，その中で河上の「徳川時代ノ経済学説ヲ論ズ」を「草創期」の重要な労作として紹介している。（著作集第2冊，1971年，316—317ページ）。

めていった（最初の労作は「本多利明の経済説」，『経済論叢』1916年1－6月）のである。ところで1939（昭和14）年に京都大学の経済学部は大巾なカリキュラムの改訂をおこない[28]，その際日本経済思想史と東亜経済思想史とが新設された。私は当時学生として本庄教授の日本経済思想史と穂積文雄助教授の東亜経済思想史[29]の講義を聞いたが，その時の講義は後にまとめられて出版された。本庄『日本経済思想史概説』上巻（有斐閣，1940年，完本は1946年に刊行）と穂積『先秦経済思想史論』（有斐閣，1942年）がそれである。

戦後京大では上記の二つは学部の講義としてはなくなったが，本庄が創設以来教授であった大阪府立大学経済学部では日本経済思想史の講義がおかれ，現在では本庄門下の藤井保義によって行われている。また本庄門下の大山敷太郎が教授だった甲南大学経済学部でも日本経済思想史の講義があって，大山の停年退職後は私が担当している。

経済学史学界でも日本経済思想史の研究が漸次さかんになりつつある。その機運の一つの契機となったのは，文部省の科学研究費をうけて1966—69年に経済学史学会代表幹事堀経夫を代表者としておこなわれた共同研究「社会経済思想の発展より見た日本の近代化」であった[30]。堀経夫も河上門下の一人で，リカードウ研究で学位をえたが，1930年頃から日本の経済思想史にも関心を持つようになり，1935年に『明治経済学史』を公刊して以来，ずっとこの分野での研究を続けてきたのである。1978年の大会で経済学史学会ははじめて日本経済思想史を共通論題にとりあげた[31]。そして今年中に会員による論文集『日本の経済学』（経済学史学会編）が刊行されることになっている。

28） 当時の学部長は河上の門下で経済学史の講座を河上からうけついだ石川興二であった。

29） 1919年に経済学部が創設された時東洋経済学史という講義が小島祐馬によっておこなわれ，後に田島錦治がそれを担当した。1939年3月の科目改正でそれが東亜経済思想史となったのである。『京都帝国大学史』（1943年）1031ページ参照。

30） 杉原四郎編『近代日本の経済思想』（ミネルヴァ書房，1971年）はこの共同研究の一成果である。

31） 杉原「日本経済思想史研究の現況」（杉原『近代日本経済思想文献抄』，日本経済評論社，1980年所収）参照。

このように見てくると，本稿の最初に見たように，河上自身は日本経済思想史の研究という「最初の志」を「諸般の事に妨げられて……擲った」が，彼の学統をうけつぐ人々によってこの分野の研究が進められてきたことがわかる。現在進行中の『河上肇全集』によって彼の研究の全貌があきらかになり，従来あまり知られなかった一側面，つまり日本経済思想史研究のパイオニアとしての河上肇の一面が再認識されるようになれば，それは，上記の学界の動向に照らして意義のあることと思われる。